

## 地歴・公民科 資料 No. 80

もくじ	戦争に酔う国民—日清戦争と日本人—	
巻頭	／木下直之……………	1
論説	日清戦争研究の現状と歴史教育	
	／大谷正……………	7
トピックス1	今の日本の大学生と中東・イスラーム認識	
	／水口章……………	13
トピックス2	新しい国際収支統計をもとに経済の流れを読む	
	／小巻泰之……………	19
図書紹介	……………	24

### 巻頭

## 戦争に酔う国民 —日清戦争と日本人—

東京大学教授

木下 直之

### 日清戦争 120 周年

1年ほど前に『戦争という見世物』（2013年）という本を京都のミネルヴァ書房から上梓した。出版社の意向で、タイトルは私の最初の本『美術という見世物』（平凡社、1993年、現在は講談社学術文庫でお読みいただける）に引きずられるかたちになった。本当は、サブタイトルの「日清戦争祝捷大会潜入記」を書名にしたかった。しかし、それなら「日清戦争祝捷大会」ではなく「東京市祝捷大会」と、会の正式名称を使うべきかもしれない。

なんでもそうだが、突発的な出来事に名前がつくのはそれが起こったあとであり（もちろん命名の動きは直後に始まり）、つけられた名称にはその出来事に対する解釈や評価が段階的に反映する。戦争と呼ばれる大きくて複雑な出来事の場合はとくにそうだろう。さまざまな呼び名が飛び交う。

したがって、ここで問題にする「日清戦争」という呼び名もまた唯一絶対ではなかった。私たちが「日清戦争」という言葉で、その始まりから終結までをとらえることができるのは、現代の歴史書や歴史事典がそう教えてくれるからである。

当時のひとびとにとって、同時進行形の事態の呼び名は「征清」や「討清」などなどさまざまにあった。いつの間にか始まった戦争がどのように広がり、展開し、いつ終息するのかは誰にもわからなかった。こうした事態をどのように呼ぶべきか、すぐには定まらないのである。

比較的改まった名前では、しばしば「明治二十七八年戦役」と呼ばれた。戦死者慰霊のために建てられた記念碑に、この名前が刻まれることが多かった。参謀本部が編纂した公式戦史は『明治二十七八年日清戦史』（東京印刷会社、1904—07）、海軍軍令部のそれは『二十七八年海戦史』（春陽堂、1905）、『征清海戦史稿』（非売品）などと称している。

また、当たり前の話だが、日本で「清日戦争」と呼ばないように、対戦国である清国が「日清戦争」などと呼ぶはずはない。中国では「中東戦争」と呼んだこともあったという。現在の中国では「中日甲午戦争」、あるいは「第一次中日戦争」、韓国では「清日戦争」という言い方がなされる。

最近出版された大谷正『日清戦争』（中公新書、2014年）は、こうした呼称への注意を喚起し、日清戦争の輪郭を描こうとしている。大谷の見解によ

れば、「広義の日清戦争は三つの戦闘の対象と地域が異なる戦争の複合戦争であり、一八九四年七月二三日の日本軍による朝鮮王宮攻撃をもって始まった」。ここでいう「三つ」とは、朝鮮、清、台湾である。そして、ヴィクトリア朝のイギリスが「little wars」の積み重ねであったことを引き合いに出して、日清戦争は「終期の曖昧な戦争」と結論する。

戦場となった地域の住民にとっては、戦争の輪郭はさらに曖昧だっただろう。なにしろ、自分たちの生活空間に、突如として外国の軍隊が進攻してくるのだから。

2014年は、第一次世界大戦が始まってちょうど百年目にあたったため、欧米各国でさまざまな記念式典が繰り広げられた。日本もまた戦勝国であったのだが、それほど話題にはならなかった。同時にまた開戦120周年でもあった日清戦争、開戦110周年でもあった日露戦争となると、記念行事はほとんど行われなかった。私の身近な場所では、川崎市市民ミュージアムで「日清・日露戦争とメディア」(2014年10月4日—11月24日)、北海道立函館美術館で「幕末・明治の戦争イメージ」(同年11月15日—2015年1月21日)が開催されたかぎりである。

そこに現在の日中関係、日露関係への配慮が働いていたとすれば、日清戦争への無関心は、単に戦争が遠い出来事として歴史の遠景と化したというよりは、むしろ逆に、120年前の中国とのこの戦争が今もなお生きているととらえることもできるように思うのだ。

## 東京市祝捷大会

さて、拙著で私が光を当てたものは、戦場からは遠く離れた東京市内で繰り広げられた戦争のほんの一コマである。いや、むしろ暮らしの中の一コマというべきかもしれない。「東京市祝捷大会」は、1894年12月9日、東京上野公園を会場に東京市民有志によって催された戦勝祝賀会であった。主催者はこの日のためだけに、11月22日に組織された東京市祝捷大会である。終了後、翌年5月3日に同会は公式報告書を作成した。これまた書名は『東京市祝捷大会』(土田政次郎、1905、非売品)と名づけられた。

この報告書をいくら読んでも、「日清戦争」という言葉は出てこない。大会規程第二条にいわく、「誠実ニ戦捷ノ祝意ヲ表彰シ兼テ国民ノ一致ヲ表示シ征清ノ軍気ヲ鼓舞スルヲ目的トス」(拙著に抄録)。

ここでは、「征清」と呼んでいる。

夏に始まった清国との戦争で、日本軍は陸戦に海戦に勝利を重ねてきたので、このあたりで祝勝大会を開き、軍を激励し、国民の士気も高めようという発想であった。第2回もいずれ開くことになるだろうとも言っている。この戦争がいったいつまで続くのか参加者の誰ひとりわかっていない。

この戦争が歴史的にどのような意味を持つのか、それもあまりわかっていない。いや、「祝捷大会ヲ発企スルノ趣意」では「歴史アリテヨリ以来。世界ニ於テ未ダ曾テ此ノ如キ名実俱ニ公明正大ナル戦争ヲ見ザルナリ」などと述べているのだから、主催者なりに、歴史的な位置づけを行ってはいらぬ。しかし、「公明正大ナル戦争」とするそれは、今日の評価とは大きくかけ離れている。

とにかく、当時の東京市民は戦地からつぎつぎと伝わる連戦連勝にやたら盛り上がっているのである。そこで拙著では120年をタイムスリップし、私も会場に潜入しようと企てた。そして、現地から、日清戦争の結末どころか、1945年に迎える軍の破滅や、本書刊行時の尖閣諸島をめぐる日中の軋轢などはおくびにも出さず、寒い冬の1日の熱い興奮を伝えることにした。

この日のプログラムを簡単に紹介しよう。満15歳以上の男子であれば、五十銭の会費を払って誰もが会員になることができた。予め市内各所に受付を設け、参加者はそこに申し込んで会券、会章、昼餐券を受け取った。

朝7時半に日比谷練兵場跡に集合し、桜田門から宮城前広場に入って万歳三唱(ただし天皇は広島大本営にあって不在)。その後、丸の内から日本橋に抜けて、商家の立ち並ぶ東京の目抜き通りを上野公園に向かって歩いた。団体での参加者は、それぞれに旗や幟を立て、山車を曳き、それはあたかも江戸の祭礼のようだった。

9時に上野公園に到着、旧黒門跡地に建てられた模造玄武門(平壤での激戦地)を抜けて会場に入る。10時より不忍池に臨む旧馬見所を会場に儀式が行われた。天皇皇后の肖像写真に対する拝礼に始まり、東京市長や東京市会議長ら要人の祝文朗読、靖国神社宮司による戦捷祝祭の執行、万歳三唱に終わった。皇太子も臨席した。

その後、参加者は、思い思いに会場内の余興を見て歩くことになる。川上音二郎一座による野外劇、

野試合、分捕品陳列、野戦病院の体験、幫間（太鼓持ち）による陸海軍の手踊りなどが、公園のあちこちで行われていた。そして、日が暮れるころから、この日最大の余興が始まった。不忍池を黄海に見立て、清国海軍の戦艦定遠と致遠の模造船を焼討ちし、歓声を挙げたのだった。

## 分捕石鯨

この会場で目にしたものや耳にした言葉は、現代日本のヘイトスピーチに勝るとも劣らない激しい中国蔑視に満ちあふれていた。いや、つぎのような光景を目にすれば、明治の日本人の方がはるかに残酷、冷酷であったと思うに違いない。路上やネット上に罵詈雑言が飛び交う現代の日本でも、さすがに中国人の切り首に見立てた風船や提灯、菓子や石鯨といった商品は売られていないからだ。

そんなものに溢れかえった町の様子は、本書第9章で「首また首」と題して、つぎのように描写した。しかし、筆を少し抑えている。もっと身近に実感したければ、それぞれの新聞記事にあたってほしい。

「岩谷松平と並んで、やたらと張り切っているのが平尾賛平だった。平尾の店が切り首型の「分捕石鯨」で当てたことは、すでに紹介した。行列では、店員に三本の長槍をかつがせているが、三尺もあるその穂先は清国兵の大首を貫いている。

そればかりではない。平尾の発案で、小間物問屋連は清国兵の首級数百を製作し、それを百人の雇い人が沿道に向かって投鞠のように投げ与えながら歩いた（『郵便報知新聞』1894年12月8日付）。この人出に当て込んでさまざまな店が出たが、最も売れ行きよかったものが「清兵の首に擬したる軽焼」であったという（『時事新報』同年12月10日付）。新聞『日本』の附録（12月10日）は、「群衆中の紅毛人」と題し、「支那人の首に擬したる風船数個を小筐につけたる西洋人五六群衆中にもまれ『日本人強い』『私し困ります』『支那人首破れます』と叫ぶ声々可笑しともいさまし」と報じている。

文中の「分捕石鯨」とは、馬喰町の小間物屋平尾賛平商店が彫刻家高村光雲にデザインを依頼したものである。そのころ、光雲は東京美術学校の教授にして帝室技芸員であった。「分捕」とは、本来は倒した敵から切り取った首を意味した。古来、何人の

首を打ち取ったかが軍功の証とされたからだ。そうした伝統を踏まえて、光雲がおそらくは木に彫った清国兵の首を原型にして、平尾は石鯨をこしらえた。そして、弁髪に見立てた紐をとりつけた。「分捕しやぼん」とも「吊し石鯨」とも呼ばれたようだ。「売れたの売れないのでない、製造が間に合わないくらいだった」、「その内日本が戦勝国となって、凱旋土産となったから兵隊さんが大層喜んで、国へちゃんちゃんの首を持って帰るんだと、また大変売れたそうです」と篠田鉦造が伝えている（『明治百話』四条書房、1931年）。

拙著には、『平尾賛平商店五十年史』（平尾賛平商店、1929年）に収録されている「明治二十七、八年頃の主要発売品」という図版を掲載した。もともとは色刷りの商品広告だったと思われるその画面には、「分捕しやぼん」がはっきりと描かれているからだ。



図1 分捕りしやぼん「明治二十七、八年頃の主要発売品」

実は、篠田鉦造『明治百話』にも「ぶんどり石鯨の雛形」という図版が掲載された。同書のために光雲自ら描き、篠田はそれに対する謝辞を序文に書いている。ところが1996年に刊行された岩波文庫『明治百話』では、謝辞はそのままあっても、肝心の「ぶんどり石鯨の雛形」はどこにも見当たらない。巻末に「岩波文庫編集部」の名前で「本文中に、さまざまな差別や偏見にもとづく表現が見られるが、本書の歴史性を考慮してそのままとした」と断り書きをしているにもかかわらず、挿絵だけが削除された。こんなふうにして、歴史の細部が忘れられてゆく。

中国人の切り首を石鯨に仕立てるまでに明治の日本人は残酷だった、冷酷だった。と書けば、ひと昔前に流行った「自虐史観」という言葉がよみがえってくる。そこまで祖先を貶め、自虐的にならなくてもよいではないかと。あの言葉がひとしきり使われ

たころ、日清戦争期に急速に高まる中国人蔑視を考えるならば、「自虐」はまだまだ足りない私は思った。しかし、一方で、現代人が現代の基準で明治のひとびとを一方的に断罪するのもまた違うだろうとも考えた。

切り首の模造品に興じることが、本当に残酷なことなのかという問い直しが必要である。東京市祝捷大会に集まったひとびとは、なぜ切り首にかくも熱狂したのか。その答えを得るためには、今度は切り首というものについても知らなければならない。

## 大江山凱陣

東京市祝捷大会には、個人参加ばかりでなく、町会や会社や学校などさまざまな団体が参加している。思い思いの旗や幟を立てて、手作りの山車やつくりものを曳いて練り歩いた。その中に、大きな龍の首を車に載せて歩いた団体があつた。都新聞社である。龍は新聞の紙型を用いてつくられた。目玉がぐるぐ



図2 都新聞社作り物

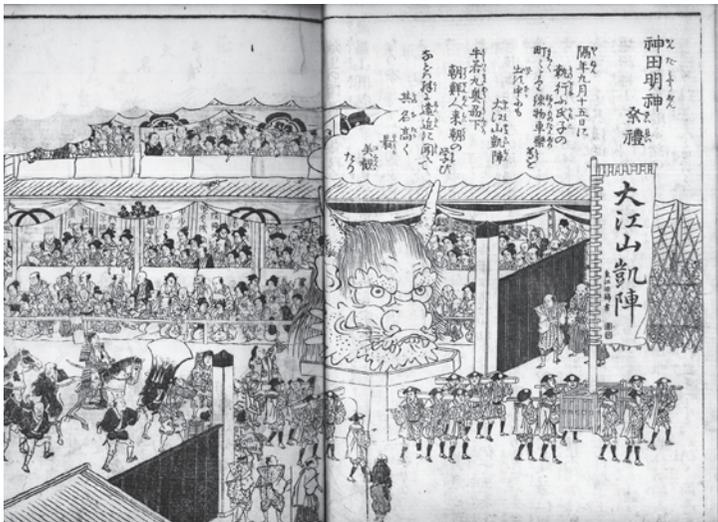


図3 神田祭「江戸名所図会」

ると動いた。いっしょに音楽隊が乗り込み、軍歌「鎌倉男児あり」(作詞作曲永井建子)を演奏し続けた。それを、日本兵に扮した数十人の社員が引っ張った。

いうまでもなく、龍は中国皇帝を象徴し、切り落とされた首はそれが倒されたことを意味した。首を台車に載せて運ぶイメージは、江戸時代の神田祭で曳き回された鬼の切り首に直結している。江戸の祭礼といえば神田祭(神田明神)と山王祭(日枝神社)が双璧で、隔年で交互に執り行われた。その様子は、浮世絵や絵巻、『江戸名所図会』や『東都歳事記』などの版本で目にする事ができる。神田祭に毎回出たわけではないが、『江戸名所図会』には巨大な鬼の切り首を曳き回す「大江山凱陣」の仮装行列が描かれている。この絵は幕末に来日したスイス使節エーメ・アンベールの『幕末日本図絵』にも収録され(ヨーロッパの画家によってははるかにリアルに描き直され)、広く知られることになる。

もともと「大江山凱陣」は京都を舞台にした伝説であり、行列が再現したものは鬼退治を成し遂げた武者たちの都への凱旋の場面である。舞台を江戸に移し、江戸の町の繁栄を讃えるという趣向になっている。こうした都市を挙げての祝祭は、江戸が東京と名前を変えたあとも続く。神田祭、山王祭ともに、明治維新の混乱期には少し低調となったものの、少しずつスタイルを変えながらも継続し、今日にいたっている。

これに加えて、明治の東京には新たな祝祭が加わった。それは国家や皇室の慶事を祝うもので、1868年の東幸、1879年のグラント將軍(第18代アメリ

カ大統領)来日、1889年の憲法発布、1894年の明治天皇成婚25周年などの慶事に、江戸時代さながらに山車やつくりものが曳き出され、仮装行列が練り歩いた。

1894年12月9日の東京市祝捷大会がこの延長線上にあることはいうまでもなく、古くから伝わる馴染み深い方法で参加者は喜びを表現したのである。そうであるなら、沿道や会場で目にした中国人の切り首のイメージだけを取り出し、そこに強い光を当てて、断罪することには

慎重であらねばならない。手法ではなく、そもそもなぜ中国人に対する蔑視が育ったのかを考える必要がある。

## 油絵茶屋

神田祭と山王祭には町人たちの仮装行列が出た。その多くは唐人行列であり、江戸のひとびとが考え、想像する異国人に扮したものであった。そこに強く影響を与えたものは、間違いなく朝鮮通信使一行の姿だった。こぞって朝鮮人の格好をして、楽しんだからだ。朝鮮国王が徳川将軍に向けて派遣した通信使は、江戸時代を通じて12回江戸を訪れた。江戸の祭礼ばかりでなく、対馬から瀬戸内海を通して東海道を下る沿道の町にも、現代もなおその面影を残している祭りがある。遠い異国から訪れる彼らは、決して侵入者でも侵略者でもなく、儒教の国から文化をもたらすひとびとであった。そうした彼らがわざわざ訪れる江戸は偉大なる都市であるというレトリックで、町人自ら朝鮮通信使を演じ、実は我が町、我が国、我が世の春を讀えたのだった。

そのようなイメージでとらえていた中国や朝鮮のひとびとを、日本人はいつから蔑むようになるのか。おそらく、文化よりも先に風俗や習俗への蔑視が始まる。

冒頭で紹介した拙著『美術という見世物』のサブタイトルは「油絵茶屋の時代」である。油絵茶屋とは浅草寺境内、奥山と呼ばれた本堂の背後に数多くあった水茶屋のひとつで、1876年に油絵の見世物を催したために、新聞でそう称された。茶屋が主催したわけではなく、写真師で知られる、というよりも写真師としか知られていない、実は多芸多彩な下岡蓮杖が自らの油絵とともに、高橋由一や横山松三郎といった仲間の画家にも出品を呼びかけて開いた催しである。

その時、一番の話題になった油絵は、函館戦争と台湾戦争を描いた2枚の大作である。それぞれに、およそ縦2メートル・幅6メートルという大きさだから、明治の油絵としては間違いなく大作と言ってよい。見世物にされた油絵など行方不明になって当たり前なのだが、奇跡的に靖国神社遊就館に現存することができる。

拙著を公刊した22年前には、これらふたつの油絵の紹介に精一杯だったが、最近になって、

1874年の台湾出兵の際の石門での戦闘の様子を描いた絵が、2年後に浅草という東京有数の盛り場で見世物になったことの意味をあらためて考えた。それは、明治国家にとって最後の内戦（この時点でまだ西南戦争は起こっていない）というべき函館戦争と最初の対外戦争というべき台湾出兵の絵が対で並んだことの意味を考えることである。

これについては、拙稿「台湾戦争図再々考」（『近代画説』第20号、2011年）にまとめた。結論からいえば、台湾戦争図に描き出されたものは近代化された日本軍と敗走する原住民「牡丹生蕃」、いわば文明と野蛮に属するひとびととの極端な対比である。日本軍の近代化は、統一された軍服と武器、負傷兵を介助する救護兵の存在などに示されている。

画面左手に大きく描かれた岸田吟香は、東京日日新聞の記者として非公式に従軍した。現地から東京に送ったレポート「台湾信報」が紙面に載り（1874年4月13日から10月7日まで断続的に掲載）、その情報はさらに錦絵や版本（たとえば『明治太平記』延寿堂、1874—1880年）とメディアを替えて広まった。

台湾出兵は、台湾に漂着した琉球漁民の殺害事件（1871年）に端を発する。琉球と台湾の支配をめぐる日本と清国の間での紛争である。清国は台湾の原住民を「化外の民」（中華文明の及ばぬ土地の民）ととらえ、日本軍と「牡丹生蕃」の戦いを傍観した。とはいえ、清国も軍隊を派遣しており、6月22日には清国使節が西郷従道台湾蕃地事務都督に日本軍の撤兵と休戦を求めている。この時の清国軍の規律の乱れについて岸田は報じている（『東京日日新聞』7月30日付）。記事は、清国使節警護にあたっているはずの清国兵士に日本軍の炊夫が沢庵大根の切れ端を与えたところむさぼるように喰ったというもので、この逸話は『明治太平記』（九編卷之二、1876年）に絵入りで描かれることになる。台湾戦争の油絵が浅草で公開されたころ、近代化する日本軍とは対照的に規律に欠ける清国軍のイメージが語られ出したといえるだろう。

## 長崎清国水兵暴行事件

その清国海軍が日本国民の前に姿を現したのは1887年8月のことである。ドイツで建造され、1885年に北洋艦隊に配備されたばかりの最新鋭の軍艦定遠と鎮遠が長崎港に入った。壬午軍乱（1882

年)、甲申政変(1884年)、天津条約締結(1885年)という具合に、朝鮮をめぐって日本と清国は政治的にも軍事的にも緊張を高めていた。北洋艦隊の長崎寄港は明らかな示威行動であった。この時、上陸した水兵らが市内で暴行事件を起こし、警察との衝突に発展、双方に死者が出た。一気に清国に対する反感が高まった。

そうした反清感情を増幅させることになる人物が、当時福岡警察署の署長を務めていた湯地丈雄である。湯地は職を擲って元寇記念碑建設運動に邁進する。モンゴルの襲来を撃退した故事を思い起こそうという提言だった。そのための資金を得るために、湯地は矢田一嘯という画家に依頼して掛け軸の油絵「蒙古襲来絵図」全14図を描かせ、全国を行脚した。これまた靖国神社遊就館に収蔵されている。

肝心の元寇記念碑はなかなか実現しなかったが、1904年になってようやく福岡市東公園に竣工した。「敵国降伏」の文字を刻んだ高い台座の上に亀山上皇像(高村光雲の弟子山崎朝雲の作)が載る。玄界灘を睨んで立っているのだが、今は福岡県庁の巨大な庁舎に視野を遮られている。ちなみに木造原型は近くの箱崎宮に祀られている。矢田一嘯については、つぎの二冊の展覧会図録を参照されたい。「よみがえる明治絵画―修復された矢田一嘯『蒙古襲来絵図』」展図録(福岡県立美術館, 2005年)、「神風そのふきゆくかなたへ」展図録(靖国神社遊就館, 2010年)。

定遠と鎮遠は、「神風」を想起させるほどに脅威だった。当時の日本海軍には太刀打ちできる軍艦はなかった。日清戦争が始まってもおこの力関係は変わらず、北洋艦隊旗艦定遠の排水量7355トンに対し、聯合艦隊旗艦松島は4217トンしかなかった。

1894年9月17日、両艦隊は黄海で激突した。定遠以下14隻に対する松島以下12隻の戦いは4時間余りで終わった。北洋艦隊は致遠以下4隻を失い、定遠も大火災を起こして大破した。一方の聯合艦隊は沈没艦を出さなかったものの激しく被弾している。日本側の戦死者は、将校10人、下士卒69人に及んだ。その戦闘の凄まじさは、水雷長であった木村浩吉大尉が戦後出版した『黄海海戦ニ於ケル松嶋艦内ノ状況』(内田芳兵衛, 1896年)の挿絵に示されている。内田老鶴の筆になる戦闘図は肉片と化す水兵たちの姿を描いてあまりにも生々しかったため、発禁処分を受けた。

海戦から3ヶ月後に、東京で再び「黄海海戦」が行われた。すでに海の藻屑と化した致遠と未だなお脅威であり続けている定遠とが不忍池に浮かんだ。夕闇が迫る中で始まった野外劇は、火を放って2隻の船を沈めることで、致遠の過去と定遠の未来を描いたことになる。実際、定遠は年が明けて2月9日に威海衛湾で仕留められた。東京市祝捷大会の公式報告書は5月3日の発行だったから、「我大会の余興は実に之れが前兆」であったと誇らしげに語っている。しかし、あの日池畔に詰めかけ、喝采を叫んだ観客の誰ひとりとして、『黄海海戦ニ於ケル松嶋艦内ノ状況』に描かれた海戦の現実を知らなかった。

### 定遠のその後

湾内で撃沈された定遠は、引揚げが可能と思われた。福岡県出身の元代議士小野隆助が名乗りを挙げた。しかし、実際には引揚げは技術的に困難で実現せず、やむを得ず、小野は部材を取り出し九州に送った。それを用いて建てた建物が太宰府天満宮に残っている。名づけて「定遠館」という。そこに至る門の扉には砲撃で蜂の巣にされた定遠の鉄板が使われている。いうまでもなく戦勝記念の建物であったが、今はそうした由緒の説明もないままひっそりと境内にたたずんでいる。

一方、中国では、山東省威海市に、2005年になって定遠が復元された。威海北洋水師旅遊發展有限公司の所有というから、観光資源としての復元だろう。さらに、2014年には、遼寧省丹東港で致遠までもが復元された。

こうした動きの背景には、中国政府が海軍の増強に力を入れ始めたことがあるに違いない。軍艦の派遣にはいたらなくても、近年、中国政府の巡視船が尖閣諸島をしきりと脅かしている。それに応じて、日本国内でのヘイトスピーチは一段と激しさを増してきた。

今から120年ほど前に東京市祝捷大会という催しが開かれ、そこに集ったひとびとが不忍池の海戦に酔いしれたことをもう一度思い出すことも、決して無駄ではない。